

ぶれいん

発行日:令和4年1月吉日

発行人:学術図書委員会

発行責任者:大西 英之

編集責任者:吉野 孝広

大西脳神経外科病院の理念

生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。

神経疾患の専門的・高度医療を実践する。

常に新しい医学の修得に励む。

救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。

地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

私が病院を開設した意味

大西脳神経外科病院

理事長 大西 英之

あけましておめでとうございます。

当院は2000年12月に開院し20年が経過しました。長いようですが人生で考えると成人したばかり、一応病院の形として落ち着いてきましたが、100年企業として厳しい医療業界の荒波を乗り越えていくには安定した基盤創りが必要です。そして先を見据えた1年ごとの計画が重要になります。

そこで今年1年をどのように展開するかを考えてみました。

大きく3点あります。

まず1点目は、この地に病院を建てた意味、病院の設立理念を皆さんに知って頂き初心に戻りこれを共有することです。私はこの地で生まれ育ちましたが、20年程前は大阪の病院で働いていました。大阪と比べ当時この地域は脳神経外科に関する医療水準が低く、専門病院もなく専門的治療が出来る状況ではありませんでした。そこで脳卒中を中心とした高度医療をこの地で展開し、医療を通じて地元へ恩返しをしたい、そして病院を作ることで脳卒中に関わる高度な技術と知識を持った医療従事者を育て、この地に貢献したいという思いで病院を開設したのです。皆さんも病院の理念と共に深く理解して頂きたいと思えます。

一昨年コロナウイルスによるクラスター感染から当院の救急医療が一時停止しました。その時100人以上の方が当院以外の病院に搬送され脳卒中救急医療が混乱し大変だったと言う話を救急隊の方から聞きました。我々の存在意義は東播磨圏域、特に明石の地域において脳神経外科救急医療の中核を担っているという事です。そこに自信とプライドをもって患者さんのために業務に取り組んで頂きたいと思えます。



2つ目は「見える化」です。各部署の業務効率化や収益はもちろん大切ですが、それ以上にお互いがどのような業務を行っているのかを知り、理解することはさらに重要と言えます。お互いの業務を知れば助け合いができます。「見える化」の最終目的はチームワーク作りです。相互にチームワーク良く仕事をし、この大西丸という船が順調に永続して進むように「見える化」したいと言うのが今年の2番目の目標です。

3つ目の目標は、各部門、各職種における専門資格や認定資格の取得を応援するということです。各部門に専門的な資格があると思いますので、積極的に取得して頂き、それを病院としても応援していきたいと考えています。若いスタッフは脳神経外科以外で働きたい、他で自

分の力を試したいと思う時期があるかもしれません。その時に、大西脳神経外科病院で育ったと胸を張って言える人材を多く輩出するために資金も含め応援していきたいと思っています。以前あるヘッドハンティング会社の女性社長が人材の長所を掛け算していくという事を言われていました。掛け算という言葉に私はとても惹かれました。普通は足し算として考えますが、今の時代掛け算のスピードが大切という事です。医療業界も物凄いスピードで進んでいます。私たちも挑戦をしていき皆さんの持つ長所を掛け算していきましょう。そうすればたくさんの発想が生まれ病院の発展につながるのではないのでしょうか。この3点を今年の目標にして一致団結し頑張りましょう、今年もよろしくお願いいたします。

令和4年の年明けに思う事

院長 久我 純弘

2020年1月に日本でも新型コロナウイルス感染が始まり、2年となりました。昨年夏の第5波以降、秋にはかなり沈静化していましたが、年末からオミクロン株の登場により状況が一変しました。今年になり急激な感性感染拡大がみられ、現時点では先行きが見通せません。ただ、どうやら感染力は強いが重症化は少ないようですが、無症候者による感染拡

大が危惧されます。昨年中にほぼ全職員の3回目のワクチン接種が終了しましたが、効果があることを祈るばかりです。この2年間ほとんどのイベントが中止、延期、縮小など大きな影響を受け、すべてが停滞した印象です。学会活動、会議もHybridを交えたWeb開催が大勢となり、最近の中止はほとんどなくなってきました。今回の新型コロナウイルス感染症に対し終息宣言がいつ出されるのか、収束はするもののいわゆる感冒ウイルスと同様に共存する状態になるのかわかりません。そもそも人類が集団生活をするようになり、文明が発達すると人口が増えるので人口密度が上昇します。

その結果としてこれまでも様々な感染症が流行してきました。そして、新型コロナウイルス感染対策として「3密」を避けることが叫ばれています。その対応の1つとしてリモートワークが推奨され出勤しないよう求められました。その一方でエッセンシャルワーカーという言葉が聞かれるようになってきました。われわれ医療人もエッセンシャルワーカーです。患者さんに接してコミュニケーションを大切にしないと成り立ちません。しかし感染を広げてはいけません。当院の基本は救急です。常にリスクを伴います。このなかで脳卒中などの地域の脳神経の救急を守り、必要な医療を安全に提供しなければなりません。現場での主体的な医療安全への取り組みが必要です。医療の質と安全の確保が目標です。皆様の主体的な取り組みに期待します。

駅前クリニック6年目の妄想

明石駅前クリニック 院長 埜本 勝司

明けましておめでとうございます。

予想通り、新型コロナウイルス感染の第6波が押し寄せてきました。しかも、オミクロン変異株という新参者をつれて猛烈な勢いで。

2年前に本誌上でご挨拶したときには、世界が新型コロナウイルスで翻弄される事態になるとは全く予想も出来ませんでした。医療に従事している我々にとっては、目の前に迫ってきた医療体制の逼迫は極めて深刻な事態であり、クリニックにおいても関係者から感染者が出ないように細心の注意と、できる限りの予防策を講じています。スタッフの人事異動では看護師の岡本さんが昨年未本院に帰り、産休が終わった鈴木さんが復帰しました。



昨年はコロナの影響もあってだろうと思われませんが、患者数もそれ以前と比べ減少しました。明石駅から徒歩1分の、雨でも傘なしで行ける便利な場所にありながら、そして新たに明石駅、山陽電車乗り場前のコンコースに設置されている広告用の音声付きデジタルサイネージにクリニックの宣伝も加えていながら、期待したほどの集患に繋がらないのは何故か？ 世間をあっと言わせるほどの特技もありませんし、他では出来ない検査もありません。しかも診療時間は他の診療所より早く終わり、土日は本院に連携して休診です。

通勤患者の利便性を考えればもう少し遅くまで診療するとか、土曜日も診察するとかの工夫も必要ではないかと妄想しても、働き方改革を云々する今日では、スタッフの確保や人件費が大きな問題です。

となれば現状を維持しながら、地道に誠意を尽くして診療に当たるしかないのかなと思直すこの頃です。あっという間に情報が氾濫するスピード時代でも、病んでいる人を対象とする医療では患者さんの心情をくみ取り、亀のごとく一步一步前進して行くことで信頼され、より多くの患者さんが受診してくれる診療所になって行くのではないかと考えています。



近江八幡市:伊崎寺山門 画:埜本勝司

専用の光ケーブルを通して、本院で毎朝行われている症例検討会を視聴したり手術をリアルタイムで見ることが出来、毎月の朝礼で本院職員の姿や理事長の話を見ることが出来ることで連帯感を実感していますし、大西脳神経外科病院という大きな枠組みの中のランチとしてそれなりの役割を担っていることにやりがいも感じています。

クリニックでは出来ない検査結果も本院との連携でスムーズに進むこと、患者さんの要望に従って本院でもクリニックでも結果説明や治療が出来る体制になっている点も強い連携のおかげです。開設2年目から始めました昼休みのミニ講座は残念ながらコロナの影響で2年間中止したままですが、クリニックの意義を具現出来るミニ講座が再開できる日が近いうちに来ることも妄想しています。

本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

危機管理再考

副院長 大西 宏之

あけましておめでとうございます。

未だコロナ終息の目処が立たず、さらにオミクロン株により第6波に差し掛かるかという激動の中2022年がスタートしました。当院は一昨年、開院20周年を迎えましたが脳神経外科専門病院として確固たる地位を築き地域の皆様に心から信頼される病院へと成長しました。登録患者数は17万人に届こうかという勢いで、年間手術件数も800件を超えるのが当たり前となっています。この20年間でめまぐるしいまでの発展を遂げており、本当に攻めた20年であったように思います。



しかし、この数年間のコロナ禍を通じて、我々は開院以来初めてクラスターによる病院業務停止などを経験し、不測の事態にも揺るがない盤石の経営地盤が必要であることも痛感いたしました。つまり、守りの運営も必要であるということです。私自身、昨年4月に医療安全部長の役を仰せつかり、病院危機管理についても考える機会が多くありました。この場では危機管理について再考してみたいと思います。病院危機管理を行う上で、医療安全、感染対策などの他、自然災害、不祥事といった不測の事態にも対応

していかなければなりません。危機管理への体制を整備するにあたっては、危機の早期発見、認識、危機管理体制の整備、危機管理活動をモニタリングしていくことなどが重要となります。実際の臨床の現場に置き換えてみると、現場で起こった問題を危機として捉え、直ちに上長に報告します。チームで問題解決に向けてのプロセスを構築し、病院全体で実行に移す。そして問題を解決した後はその事例の経験を共有し、次の危機管理に向けてモニタリングするといった流れになります。有事の際に必要なことは、誰に相談し、指示を仰いだらいいのか、指示系統が明確になっていることとあります。平時より連絡手段を含めて確認し、部門間で周知徹底できていることが安心感にもつながり、非常に重



要です。さらには危機を最小限に食い止めるためには、即座に、事実をありのままに報告することも大切です。これはなかなか難しいことではありますが、相談しやすい環境、良好な信頼関係があってこそできることですので、上司、部下問わず、日々のコミュニケーションから良好な関係が築けるよう意識していただきたいと思います。近年、コロナ禍で飲み会などもなくなり、普段のマスク生活から顔が見えずコミュニケーションが希薄になっているようにも感じます。

特に若手の方たちは、自分から歩み寄ることが難しいですので、部長、科長問わず上司の方から積極的に現場に出向き、声かけをしチーム全体で取り組んでいただければと思います。

堅苦しい話ばかりになりましたが、今年は寅年です。皆様方には未来への希望を持って思う存分力を発揮し、のびのびと充実した毎日を過ごしてもらえれば幸いです。そして私自身、ポストコロナにむけて今からできることを着々と準備し、新たなことにもトライしていきたいと思います！！

思考の柔軟性

脊椎・脊髄センター長 山本 慎司



年号が令和になり4年目になりました。昨今の世の大混乱は有史以来当然のように何度も繰り返されてきたイベントではありますが、限りある我々の人生において実際に経験することは限定的で、教養としてある程度の歴史を学んできていても、いざ遭遇すると慌てふためくところがまだまだ勉強不足であることの証明でしょうか。

もともと出不精ではありましたが、パンデミックの影響でこの2年間はさらに拍車がかかり、休日はほとんど自宅で読書三昧の生活を送っています。思考や知識が一辺倒にならないように社会学、地政学など、医療医学以外の他分野を選んでいますが、特に宇宙論、素粒子論の発展が目覚ましいようで積極的に知識のアップデートを行っています。我々が日々の業務で関わっているのは、ヒト組織の循環障害、遺伝子異常、免疫反応、薬物や物理的侵襲な

どへ反応、加齢退行性変化などで、有史以来の様々な事実の積み重ねを元にして得られた経験科学ですが、宇宙論や量子力学などはそのほとんどが観察が困難な理論科学です。たとえば100年前にアインシュタインが自身の理論をもとに存在を予言したブラックホールも、先日ようやく地球サイズの電波望遠鏡を用いることで、太陽の65億倍の質量で5500万光年離れたブラックホールを初めて観測しその存在が確認できた程で、このようなスケールと比べるといかに日々の自分の思考の柔軟性が低下しているかを思い知らされま

す。ちなみにこの世界は3次元空間プラス時間軸の4次元時空ではなく11次元時空だそう（残りの余剰7次元はどこにあるのでしょうか）、現在は宇宙誕生から138億年（ 1.38×10^{10} 乗年）とされますが、ビッグバンから始まったこの宇宙空間の寿命は10の100乗年と見積もられているようで、この令和4年現在はまだ宇宙誕生直後だそうです。宇宙の果てやビッグバン以前のマザーユニバースを観測することはもちろん不可能ですが、様々な理論を用いて新たな仮説も生み出されてお

り、経験科学で生きる我々にはとても力が及ばないところです。COVID-19のおかげでいろいろ勉強させていただきました。

だいぶ話が脱線してしまいました。パンデミックに対する防御もあり我々の行動のみならず思考もかなり閉鎖制限的になってしまいました。SDGsやDiversityといったスローガンもそうですが、未来を見据え、皆が幸せになり発展し続けるために、自分の経験を基にした固定概念から少し視点を変え、思考の柔軟性を回復させてみてはいかがでしょうか。





基軸を忘れず 信じて進む

看護部長 前田ゆうこ

2022年が始まりました。新型コロナウイルスの感染拡大により、あらゆることへ影響が出始め、早いもので3回目の冬を迎えています。

2021年7月その混乱のさなか、私は看護部長という大役を任せられ看護師人生において大きな転機となりました。開院20周年という節目の年でもあり身の引き締まる思いです。

いま世の中は新型コロナウイルスの影響で、人との関わり方や生活が変わり、抱えるストレスも様々な場面で増えています。

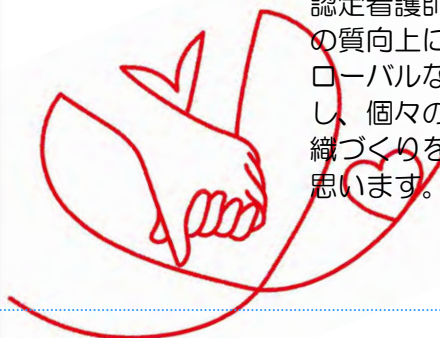


看護部長となり現場から離れた視点でスタッフと関わるが多くなりこれまで以上に人へ関心を持ち、コミュニケーションをとることが大切だと実感しています。常にマスクを装着しているため表情が分かり難く、そもそもマスクを外した顔を知らないという職員がいることが普通になっていることに、寂しい世の中になってしまったなど改めて感じます。だからこそ自分の視線や目の動き、コミュニケーション方法が重要で、相手がどう思っているのか関心を持ち、協調を意識し連携をとることでチームや組織としての「まとまり」に繋がるのではないかと思います。それは、患者さんやご家族への対応においても同じで、相手の立場にたち信頼関係を築くことに努めることでより地域の方々から信頼される病院として発展できるのだと思います。

新型コロナウイルス感染は終息する目途が見えず、同じような状況が続きます。それでもみなさんは自身の職業を全うすべく心身ともに疲弊しながらも、目の前の患者さん・ご家族と向き合っておられます。私にできることは何か、どうすれば現状を打開できるかを常に考え、あきらめず前向きに、そして自分なりに微力ながら精一杯取り組んでいこうと思います。



認定看護師もまた増えました。より看護の質向上に向け専門的知識を深め、グローバルな視点で活動することを目標とし、個々の能力が発揮できる活気ある組織づくりを目指して頑張っていきたいと思っています。



一致団結して

副看護部長 **吉原 朋子**

明けましておめでとうございます。

秋頃から新型コロナウイルスの感染が縮小傾向であったのもつかの間、新年も変異株の1つであるオミクロン株の感染拡大で第6波到来の気配を感じながらのスタートになりました。昨年は前年からのコロナ禍が続く中、4月に手術室兼救急外来の看護師長を拝命致しました。他のスタッフも手術室と救急外来の兼任ですが、限られた人数での運営であったので時には他部署の応援も仰ぎながら全員で



一致団結して乗り切ることができました。私個人としても手術室での勤務が初めてでしたので、師長業務と並行して手術室看護師としての技能を勉強しながら例年以上に多忙な1年となりました。未経験である手術室への異動は大きな不安がありましたが、同時にこの歳になって新しいことに挑戦できる機会をいただいたことをうれしくも思いました。慣れない状況の中で一緒に頑張ってくれたスタッフの皆さんにはとても感謝しています。さて、本年も冒頭で述べましたように予断を許さない状況下での業務となりますが、地域の神経救急医療のかなめとして当院の救急外来・手術室の機能維持と安全な医療の提供に向けて努力していきます。そのために引き続きスタッフ一丸となって前に進んでいきたいと思えます。



年頭に際して

事務部長 **藤井 健**

年頭の朝礼にて、大西理事長の講話に並々ならぬ熱を感じました。この地に開院した目的に改めて触れられ、ここで脳神経外科医療を担う誇りと働く喜び、生きる喜びを職員には感じて欲しいとの直言に気迫がみなぎっていました。

コロナ禍で医療に従事する職員は、職場でも家庭でも感染対策に細心の注意を払わねばならず、気の滅入ることも多かったこの2年間であり、新たな年を迎えて、未来に目を向けて明るく元気を出して行こう！と、職員を激励してくださったのだと私は受け止めました。

理事長の講話を、復職されたばかりの川合先生は最前列で直立のま

ま聴かれていました。先生からは、職員に是非伝えたいことがあると事前に伺っており、理事長の講話後に職員に向けてお話をくださいました。川合先生のお話もまた、我々職員を温かく励ましてくださるものでした。先生はお話の中で「当院の医療に憧れて」と表現され、川合先生のような方が憧れられる医療に携わっている職員の一員として、改めて誇りを感じる瞬間でした。

大西理事長と川合先生の熱のこもったお言葉に力をいただき、迫ってきた大波を乗り越えた先の光を目指して、職員一丸で邁進して参りましょう。



一層の連携をお願いします

事務次長 **瀧原 健司**

明けましておめでとうございます。

昨年一年間を振り返ってみますと、感染対策やワクチン接種等々、新型コロナ関連にかなりの時間と労力を割いた年であり、その中で職員一人ひとりの努力により地域の医療活動を担うことができた実感しています。

年が変わり2022年は2年に一度行われる診療報酬改定を4月に控えており、急性期・回復期・クリニックでの医療を担う当法人にとって、厚生労働相の諮問機関である中央社会保険医療協議会での議論を注視しているところです。また、国が勧めるマイナンバーカードを活用した健康保険証の「オンライン資格確認」導入を予定しています。マイナンバーカードのICチップ、もしくは健康保険証の記号番号などによりオンライン上で医療保険の資格情

報の確認ができるようになり、事務作業が効率化され、待ち時間の短縮、患者満足度向上に繋がります。そして、患者さんの同意により、かかりつけ医でなくても特定健診結果情報の閲覧や、薬剤情報が共有できるようになり、医療費抑制に繋がります。同時にキャッシュレス化も促進をはかりたいと考えています。しかし、現状では課題もあり、関係部署がより一層連携し合い、導入に向けて取り組みたいと考えています。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

コミュニケーションのすすめ

医療技術部長 **吉野 孝広**

以前ネパールへ行ったときに宿泊したシェアハウスでドイツ人の若い医師と話す機会がありました。片言の英語でうまくコミュニケーションも出来ていませんでしたが、日本アニメがとても好きらしく、その話題で異常に盛り上がり1時間以上もお酒を飲みながら話したことを記憶しています。コミュニケーションを取るためには相手と共通の話題がある事がこの時大切だと思いました。思えば理学療法士になった当時何とかして年配の患者さんとコミュニケーションを取ろうと古い映画のビデオを借りて観ていました。最近では逆に若いスタッフと話す機会が多くなり自分なりのコミュニケーションをとってはいるのですが果たしてうまくいっているのかどうかは不明です。ぜひ医療技術部のスタッフに聞いてみてください。

とは言えコロナ禍にあってマスク越しの表情に、この人いったい誰だろう…とならないよう一所懸命観察し体格や髪形、歩き方や仕草で誰だかわかるくらいの高いコミュニケーション能力を持たないといけないと思います。院内すべての職員の名前を呼んで挨拶できるように心がけそこからもう一言コミュニケーションできるよう今年1年頑張りたいと思います。よろしくをお願いします。

編集後記

令和と言う元号にまだ慣れないまま4年目が来てしまいました。Hと書いて書き直し、いつまでたっても学習しない自分に苦笑いしながらもようやく

「ぶれいん」43号が完成いたしました。今年も原稿依頼のお願いに各部行くとお思いますのでご協力をお願いします。

(吉野)

